

## 児童虐待に対する教師の意識に関する調査研究 (5)

—保護者の社会意識と児童虐待判断指標の予備的分析—

田中陽子 藤田由美子\* 横山 裕

Research on Teacher Attitudes toward Child Abuse (5) :  
A Preliminary Analysis on Mothers' attitudes toward life and perception of child abuse

Yoko Tanaka Yumiko Fujita\* Yutaka Yokoyama

### Abstract

The purpose of this study was to investigate how typical mothers would evaluate a potential case of child abuse and how that evaluation relates attitudes toward life. Subjects were 119 mothers who have elementary-aged schoolchildren or junior high school-aged children.

Subjects completed three surveys: 1. regarding suspected child abuse cases, 2. attitudes toward life and 3. personal information questions. Factor analysis on attitudes toward life and perception of child abuse revealed five factors weighing on the attitudes toward life, three factors weighing on the child and two factors weighing on the family. Our results suggest that there was the relationship between 'the common idea' in attitudes toward life and 'the problem relationship of the family' in the perception of child abuse.

We also found that junior high school teachers and mothers in our study had differing perception of child abuse.

Key word : Child Abuse, Attitudes toward Life, Mothers, Teachers

キーワード : 児童虐待、人生観、母親、教師

2008.11.30 受理

### はじめに

平成17年度学内共同研究「児童虐待に対する教師の意識に関する調査研究」(研究代表者:田中陽子)では、児童虐待に対する教師の意識を明らかにするために、比較対照として保護者にも「児童虐待に対する意識調査」を行った。本研究はその保護者の回答データの分析に基づくものである<sup>1), 8), 9)</sup>。

2000年に「児童虐待の防止等に関する法律」が施行された後、2004年には「児童虐待の防止等に関する法律の一部を改正する法律」「児童福祉法の一部を改正する法律」

など児童虐待に関する各種法改正が行われた。その中で特に学校の教職員もその早期発見に努めなければならないとされた(第5条)。しかし、児童虐待の内容としては実父母による心理的虐待が増加の傾向にあり、学校におけるその発見、対応は困難が増している。

それらを背景に、文部科学省では、2005年に「学校等における児童虐待防止に向けた取組に関する調査研究会議」に委託し、学校等における児童虐待防止のための取り組みの現状と課題を探り、その対応策を検討することを目的として、「学校等における児童虐待防止に向けた取組に関する調査研究」を行った。その結果、児童虐待のケース

九州保健福祉大学社会福祉学部 臨床福祉学科

Department of Clinical Welfare Service, School of Social Welfare, Kyusyu University of Health and Welfare

\*九州保健福祉大学社会福祉学部 子ども福祉学科

\*Department of Child Welfare Service, School of Social Welfare, Kyusyu University of Health and Welfare

〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714番地1号

1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki Pref. 〒882-8508

にかかわった教職員の割合は3割強であった。これは田中ら(2007)<sup>9)</sup>の被虐待児の担任経験者数の割合とほぼ同様である。また、教職員単位での虐待防止法の周知は、市町村が68%であり、これも田中ら(2007)<sup>9)</sup>の児童虐待に関する研修に1回以上参加した教師の割合と近似している。そして、今後の課題として、教員研修の一層の充実や更なる実証的な調査研究などが挙げられている。

教師が児童虐待(以下、虐待)に対応するには、現状を把握し、その早期発見・早期対応を妨げている問題点を明らかにしなければならない。

そこで、筆者らは、2005年に虐待に対する教師の意識について、虐待に関する学校の現状、教師が虐待と判断する事柄、教師のストレスの状況、教師の子どもの時代の経験、職業的社会化の経験、そして人権観(ジェンダー問題も含む)との関連で検討するために、質問紙調査を行った。その際、教師の意識をより鮮明につかむために比較対照として、保護者の意識の質問紙調査も行った。

本研究では、保護者の社会意識と虐待判断指標を明らかにすることを目的とする。

## 調査の概要

### 1. 調査の時期

2005年7月に行った。

### 2. 対象者

研修会に参加した教職員および保護者を対象とした。調査票は、研修会主催者の協力により、資料に添付して配布され、退出時に備え付けの回収箱に提出する方法で回収された。

回収数は695、このうち有効回答は642であった。本研究では、このうち小・中学校の保護者による回答119件(有効回答数の18.5%)の分析結果とした。また、対象者の状況を一定とするため、本研究では現在配偶者のある母親のみとした。母親の年齢の内訳を図1に示す。

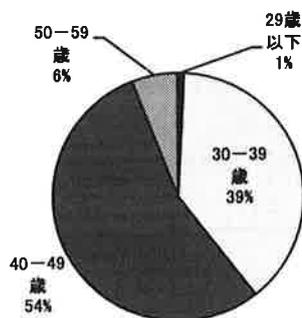


図1 対象者の年齢

## 3. 調査内容

- (1) 基本属性：年齢、性別、配偶者の有無
- (2) 中学生時代の経験：15項目
- (3) 現在の価値意識：54項目
- (4) 虐待の判断指標：宮崎県で行われている虐待発見のためのチェック項目<sup>10)</sup>に基づき、子どもに関するもの22項目、親に関するもの13項目。「虐待と判断する」「だいたいそう思う」「少しそう思う」「全くそうは思わない」の4件法で行った。

## 結果と考察

### 1. 保護者の現在の価値意識の分析

保護者の現在の価値意識の54項目の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果およびフロア効果の見られた19項目を以降の分析から除外した。

さらに残りの35項目に対して、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、5因子を抽出し、十分な因子負荷量を示さなかった19項目を除外した。そして再度、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。バリマックス回転後の最終的な因子パターンを表1に示す。なお、回転前の5因子で16項目の全分散を説明する割合は62.0%であった。

第1因子は4項目で構成されており、「古典や先人の教えが、自分の人生に影響を与えていると思う」、「よりよく生きるためには、古典や先人の教えは大切だと思う」など、人生において古典や先人の教えを重視し、尊重するような項目が高い負荷量を示していたため、「先人重視の人生観」因子と命名した。

第2因子は4項目で構成されており、「体力において男性がまさる以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのはやむをえない」、「女性は男性にくらべ、臆病だ」など、社会の中での男性の優位性に関する項目が高い負荷量を示していたため、「社会的男性優位性」因子と命名した。これらの4項目は、藤田ら(2006)<sup>11)</sup>で示されたジェンダー観の因子分析結果の「因子2 社会における男性の優位性」に含まれるものであった。

第3因子は4項目で構成されており、「社会的活動は、他人に評価されなければ意味がないと思う」、「子どもは、どんな親であっても親のそばで暮らすことが幸せである」など、従来から現在までの社会通念と考えられる内容が多かったため、「社会通念」因子と命名した。そのうち、「家族よりも友人が大切である」がここに位置するのは、時代の変遷を感じさせるものである。

第4因子は2項目で構成されており、「子どもは、親など年長の家族の言うことを聞くべきである」、「子どもが大人の言うことを聞くのは、当然である」など、子どもに対して従属することを求める内容であったため、「従属的子ども観」因子と命名した。これら2項目は、藤田ら（2006）<sup>11</sup>で示された子ども観の因子分析結果の「因子2 大人への従属的存在としての子ども」と同じものであった。

第5因子は2項目で構成されており、「子どもは未熟なので、大人が正しく導いてやるべきである」、「学校は親子の事に口を挟むべきではない」など、親を中心とした子どもに対する大人の指導性に関する項目が高い負荷量を示していたため、「大人の指導性」因子と命名した。

## 2. 保護者の虐待の判断に影響を与える要因の分析

### （1）子どもに対する虐待の判断指標

子どもに対する虐待の判断指標の22項目の平均値、標準偏差を算出した。そして、天井効果およびフロア効果の見られた4項目を以降の分析から除外した。

さらに、残りの18項目に対して主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、3因子を抽出した。バリマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、回転前の3因子で18項目の全分

散を説明する割合は68.8%であった。

第1因子は10項目で構成されており、「他者との身体接触を異常に怖がる」、「万引きなどの非行が見られる」など、保護者が外からとらえることができた子どもの問題行動に関する項目が高い負荷量を示していたため、「子どもの問題行動」因子と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「保護者がいると顔色を窺うが、保護者がいないとまったく保護者に関心を示さない」、「食べ物への執着が強く、必要以上に食べる、あるいは食欲がなさ過ぎる」など、子どもに対して日常生活の中で感じる不自然な態度や外見に関する項目が高い負荷量を示していたため、「子どもの不自然な態度・外見」因子と命名した。

第3因子は3項目で構成されており、「傷に対する説明が不自然であったり、説明を嫌がる」、「不自然な外傷（打撲や、やけどなど）が見られる」など、子どもに対して日常の中で感じる不自然さの中でも特に外傷に関する項目が高い負荷量を示していたため、「子どもの外傷」因子と命名した。

田中ら（2007）<sup>8)</sup>の教師の因子分析の結果も3因子であったが、本研究の結果とは異なるものであった。教師の場合は「教室での問題行動」因子が見出されたが、当然のことながら、保護者では因子としてまとまらなかつ

表1 保護者の家庭・学校観の因子分析(Varimax回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III	IV	V
34古典や先人の教えが、自分の人生に影響を与えていると思う	.798				
35よりよく生きるためには、古典や先人の教えは大切だと思う	.662				
31宗教や信仰の世界は自分には無縁だと思う*	.618				
32自分が生まれる前も死んだ後も続いていく、永遠のときの流れを感じ取ることがある	.582				
13体力において男性がまさる以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのはやむをえない		.896			
14女性は男性にくらべ、臆病だ		.561			
16男性は女性にくらべ、人を使うのが上手である		.549			
12たくましい精悍な体つきは、男の魅力として重要である		.390			
33社会的活動は、他人に評価されなければ意味がないと思う			.594		
27子どもは、どんな親であっても親のそばで暮らすことが幸せである			.520		
9女性は家庭を管理したほうがよく、政治や社会の管理は男性に任せておくほうがよい			.501		
37家族より友人が大切である			.429		
26子どもは、親など年長の家族の言うことを聞くべきである				.763	
17子どもが大人の言うことを聞くのは、当然である				.593	
21子どもは未熟なので、大人が正しく導いてやるべきである					.753
47学校は親子の事に口を挟むべきではない					.572

\* 逆転項目

た。保護者の場合は、教師の「教室での問題行動」と「他者との関係の異常さ」が「子どもの問題行動」としてまとめられ、また、教師の「生活上の不自然さ」が「子どもの不自然な態度・外見」と「子どもの外傷」に分けられた。保護者の場合は、「子ども」に対して、目の前の自分の子どもを中心とし、その子へかかわる者としての他の子どもという視点が強いと考えられる。一方で、教師は、教室を中心とした子どもたちの関係性や集団のルールを重視して子どもを見ていると言えよう。

## (2) 親に対する虐待の判断指標

親に対する虐待の判断指標の13項目に対して主因子法・バリマックス回転による因子分析を行い、2因子を抽出し、2因子ともに十分な因子負荷量を示した1項目（「保護者の気分の変動が激しく、自分の思い通りにならないとすぐに体罰を加える」）を除外した。再度、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。バリマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表3に示す。なお、回転前の2因子で13項目の全分散を説明する割合は62.8%であった。

第1因子は7項目で構成されており、「子どもに心理的に密着しすぎている」、「教師との面談を拒む」「保護者と連絡が取れない」など、親の人間関係の問題に関す

る項目が高い負荷量を示していたため、「親の問題のある関係性」因子と命名した。

第2因子は5項目で構成されており、「酒や薬物を乱用している」、「子どもの扱いが乱暴あるいは冷たい」「夫婦仲が悪い」など、子どもを育てるにあたって親として問題だと思われる行動に関する項目が高い負荷量を示していたため、「親の問題行動」因子と命名した。

これらは田中ら（2007）<sup>8)</sup>で示された教師の因子構成と異なっていた。子どもに対する虐待の判断指標と同様に、教師と保護者の間で、親に対する見方の違いがあるものと考えられる。保護者の「親の問題のある関係性」と「親の問題行動」は、言い換えると、保護者として、他の保護者の見えるところと家の中の見えないところなのかもしれない。特に関係性は、他者からはわからないことも多く、行動に表れなければ噂になることも難しい。これが、虐待を発見しづらくしている要因とも言えるのではないだろうか。また、除外した項目は、親の関係性から考えても行動から考えても重要なものであった。しかし、1項目の中に関係性と行動の2つの要因が含まれるため、項目としての文章表現の再考が求められよう。ちなみに、教師では「保護者の暴力的な行為」とされた項目であった。

表2 保護者の子どもの虐待判断指標の因子分析(Varimax回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III
16他者との身体接触を異常に怖がる	.765		
18万引きなどの非行が見られる	.763		
21家に帰りがらない、または家出を繰り返す	.754		
15衣服を脱ぐ事に異常な不安を見せる	.749		
19虚言が多い	.741		
17極端な性への関心や拒否感が見られる	.713		
13乱暴であったり、ひっきりなしに注意を引こうとする	.702		
14いったんハメを外すとコントロールがきかない	.689		
12生き物に対して残虐な行為を行う	.632		
22理由がハッキリしない欠席や遅刻が多い	.625		
6保護者がいると顔色を窺うが、保護者がいないとまったく保護者に関心を示さない		.720	
5食べ物への執着が強く、必要以上に食べる。あるいは食欲がなさ過ぎる		.695	
4季節にそぐわない服装をしていたり、衣服がいつも汚れている		.612	
7過度に緊張し、おどおどしている		.516	
9特別な病気がないのに体重や身長の伸びが悪い		.497	
2傷に対する説明が不自然であったり、説明を嫌がる			.788
1不自然な外傷(打撲や、やけどなど)が見られる			.720
3表情が乏しく元気がない			.586

### 3. 現在の価値意識と虐待の判断指標のそれぞれの下位尺度の関連

保護者の現在の価値意識のそれぞれの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「先人重視の人生観」下位尺度得点（平均2.86、SD .60）、「社会的男性優位性」下位尺度得点（平均2.20、SD .54）、「社会通念」下位尺度得点（平均2.11、SD .51）、「従属的子ども観」下位尺度得点（平均2.84、SD .59）、「大人の指導性」下位尺度得点（平均2.61、SD .52）とした（図2）。また、内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、「先人重視の人生観」で $\alpha = .69$ 、「社会的男性優位性」で $\alpha = .66$ 、「社会通念」で $\alpha = .56$ 、「従属的子ども観」で $\alpha = .65$ と十分な値が得られた。「大人の指導性」で $\alpha = .39$ であった。現在の価値意識の下位尺度間相関を表4に示した。現在の価値意識では、3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。しかし、「先人重視の人生観」は独立したものと考えたほうがよいだろう。また、「大人の指導性」は信頼性が低いものであった。しかし、「従属的子ども観」とは正の相関を示しており、虐待の発見を阻む要因ともなり得る尺度であると考えられたため、このままとした。

保護者の虐待に関する判断指標のそれぞれの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「子どもの問題行動」下位尺度得点（平均2.25、SD .67）、「子どもの不自然な態度・外見」下位尺度得点（平均2.19、SD .61）、「子どもの外傷」下位尺度得点（平均2.68、SD .59）、「親の問題のある関係性」下位尺度得点（平均2.25、SD .58）、「親の問題行動」下位尺度得点（平均2.63、SD .66）とした。また、内的整合性を検討するために $\alpha$ 係

数を算出したところ、「子どもの問題行動」で $\alpha = .94$ 、「子どもの不自然な態度・外見」で $\alpha = .83$ 、「子どもの外傷」で $\alpha = .77$ 、「親の問題のある関係性」で $\alpha = .88$ 、「親の問題行動」で $\alpha = .86$ と十分な値が得られた。虐待に関する判断指標の下位尺度間相関を表4に示した。虐待の子どもに関する判断指標の3つの尺度、親に関する判断指標の2つの尺度では、5つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

### 4. 全体的な考察

本研究では、全体的にしつけなど子どもに対して強い姿勢でかかわる母親としての考えが示されたのではないだろうか。そして、その母親の考えの基になるものとして、人生観や子ども観が下位尺度としてまとめられたのではないだろうか。例えば、「社会的男性優位性」や「社会通念」の平均点は他の下位尺度よりもやや低めであった。しかし、それらと正の相関のみられる下位尺度が複数あるということは、「社会的男性優位性」や「社会通念」に該当する考えを持っている母親層が少なからずいるということではないだろうか。

虐待については、保護者は目に見える外傷や親の問題行動を中心に意識していることがわかった。「社会通念」と「親の問題のある関係性」に正の相関関係があることから、社会通念でもって問題のある関係性を判断していることが考えられる。その一方で、「従属的子ども観」や「大人の指導性」にも重きを置く傾向があり、そのために虐待の発見が遅れる可能性も少なくはないと思われる。

本研究から示唆される子どもたちを虐待から守るためにできることの一つは、他者から家庭内を見やすくする

表3 保護者の親の虐待判断指標の因子分析(Varimax回転後の因子パターン)

項目内容	I	II
5子どもに心理的に密着しすぎている	.809	
1教師との面談を拒む	.757	
3保護者と連絡が取れない	.712	
6まったく放任している	.664	
7子どもに能力以上のことを過度に要求する	.610	
8身近に困ったときの援助者がいない	.573	
2子どもの不自然な外傷に対する説明が不自然であるか嫌がる	.494	
4保護者の気分の変動が激しく、自分の思い通りにならないとすぐに体罰を与える	.427	
11酒や薬物を乱用している		.826
12子どもの扱いが乱暴あるいは冷たい		.772
13夫婦仲が悪い		.623
9その家庭が地域の中で孤立している様子が見られる		.615
10登校させない		.576

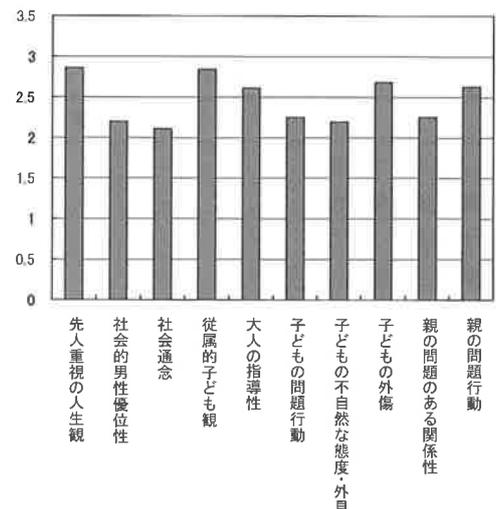


図2 保護者の下位尺度の平均点

ことであろう。また、地域を含む他者から家庭を離すことは虐待自体を増やすことにつながっているようにも思われる。しかし、それは現代の家庭が地域から離れ、核家族となって、目指してきたものと矛盾してしまう。これからの家庭のあり方は大きな課題を抱えていると言えるだろう。

現代において、子どものいる家庭の近くにいる存在であり、家庭を見やすい立場にあるのは教師であると言える。また、虐待の判断指標の下位尺度を比較すると、保護者よりも広い視野で状況をつかんでいると思われる。虐待をなくすには、このようにして子どもたちの周囲を視点の異なる大人が何重にも見守っていく必要があるのではないだろうか。これからますます、虐待への対応における教師の役割は重要となるであろう。

今後は、虐待に関する保護者と教師の視点を比較して、虐待をなくすための教師の役割を論じることが必要であろう。

#### 引用・参考文献

- 藤田由美子・田中陽子・横山裕・長友真実：児童虐待に対する教師の意識に関する調査研究（2）：教師の職業的社会化に関する予備的分析。九州保健福祉大学研究紀要 7：29-38, 2006
- 学校等における児童虐待防止に向けた取組に関する調査研究会議：学校等における児童虐待防止に向けた取組について。文部科学省報告書, 2006.
- 小林朋子, 小池若葉：教職員の子どもの虐待に関する知識と対応について：学校とスクールカウンセラーに求める援助内容を中心として。カウンセリング研究36（3）：240-245, 2003.
- 宮崎県：関係機関の役割と連携のための子ども虐待対応・援助の手引き, 2003.
- 田中陽子・長友真実・前田直樹・栗山和広・高山巖：児童養護施設における被虐待児への心理的ケアに関する研究（1）。九州保健福祉大学研究紀要 6：95-103, 2005
- 田中陽子・長友真実・前田直樹・栗山和広・高山巖：児童養護施設における被虐待児への心理的ケアに関する研究（1）。九州保健福祉大学研究紀要 7：113-122, 2006
- 田中陽子・長友真実・藤田由美子・横山裕：児童虐待に対する教師の意識に関する調査研究（3）：中学校教師の児童虐待判断指標と教師ストレスの関係。九州保健福祉大学研究紀要 8：23-33, 2007
- 横山裕・田中陽子・藤田由美子・長友真実：児童虐待に対する教師の意識に関する調査研究（2）：教師の職業的社会化に関する予備的分析。九州保健福祉

表4 保護者の下位尺度の相関と平均点、SD、 $\alpha$ 係数

	人生観	男性優位	社会通念	従属的	指導性	子の問題	態度・外見	外傷	親の関係	親の問題	平均値	SD	$\alpha$
先人重視の人生観	—										2.86	.60	.69
社会的男性優位性		—	.374**	.270**							2.2	.54	.66
社会通念			—	.297**					.285**		2.11	.51	.56
従属的子ども観				—	.240*						2.84	.59	.65
大人の指導性					—						2.61	.52	.39
子どもの問題行動						—	.729**	.745**	.716**	.582**	2.25	.67	.94
子どもの不自然な態度・外見							—	.519**	.716**	.609**	2.19	.61	.83
子どもの外傷								—	.449**	.288**	2.68	.59	.77
親の問題のある関係性									—	.664**	2.25	.58	.88
親の問題行動										—	2.63	.66	.86

\*\*p<.01 \*p<.05